

# 保育・教職実践演習におけるフィールドワークを通じた 課題解決力向上

杉山 祐子<sup>1)</sup>・明石 英子<sup>1)</sup>・冲中 秀子<sup>1)</sup>・小椋 優作<sup>1)</sup>  
菊池 啓子<sup>1)</sup>・土屋 明之<sup>1)</sup>・平松喜代江<sup>1)</sup>

## Report on Leadership Training using Fieldwork in Educational Practice

Yuko SUGIYAMA, Fusako AKASHI, Hideko OKINAKA, Yusaku OGURA,  
Keiko KIKUCHI, Akiyuki TUCHIYA, and Kiyoe HIRAMATSU

短期大学での保育者養成について、2年という短期間で保育士・幼稚園教諭として社会に輩出するためには、1年次に習得した保育・幼稚園教諭の基礎力を一層高め、課題解決力を身につける必要がある。そこで、7つの専門ゼミナールごとに、地域の保育関係機関と連携し、フィールドワークを通じた課題解決力向上に取り組んだ。各教員の専門性と選択したフィールドにおいて、学生各自が自主的に企画・準備・運営・振り返りを実施した結果、自らの課題に気づき、その解決法を構築することができた。さらに「保育・教職実践演習」では、保育の専門家からの助言により、課題の総合的考察とすることができた。今後は、卒後も課題解決を意識し、自己を振り返りながら学び続ける姿勢を見届け、この学習の効果を長期的に検証する。

キーワード：保育・教育実践、フィールドワーク、課題解決力、専門ゼミナール

### I. 問題と目的

短期大学での保育者養成では、2年という短期間で保育士・幼稚園教諭の資質を身につけなければならない。そのため、本学でも2年間を通じた保育者養成のカリキュラムが組まれている。例えば、1年次の基礎ゼミナールと2年次の専門ゼミナールを連携させ、さらに「保育・教職実践演習」が加えることで、保育の実践力である「思考力・判断力・表現力」の習得を目指している。香川(2013)は、「現在の保育者養成、とりわけ短期大学における保育者養成において、科目間連携は教育改善の最大のカギになるであろう。その際、その連携の中心になると考えられるのが『保育・教職実践演習』である。」と述べている。まず、1年次の基礎ゼミナールでは年間の行事や講座により、学生全員に保育者としての心構えや、他者とのコミュニケーション力、遊びの技術を習得する。2年次には1年次に身につけた

基礎力を専門各ゼミナールが地域の保育関係機関と連携し、あそびの実践を繰り返す。このような段階的な連携により、独自性を打ち出した教育を工夫していくことが可能になる(ダーリンプル他, 2017)。さらに並行して、「保育・教育実践演習」により、各ゼミナールでの成果と課題を共有し、専門的助言を得ることができる。このような1年次からの連続した教育により、短期間でも現場での課題解決力や指導力を高めることを目指している。「保育・教職実践演習」に関しては、2010年の教育職員免許法施行規則の改正により、教職課程の総仕上げとして位置づけられ、従来の科目に比してより実践的な教育内容が求められる(姫野ほか, 2010)。そこで、本研究では、1年次にあそびを介して培われた保育の基礎力と学生個々の課題を、2年次の専門ゼミナールでのフィールドワークと、「保育・教職実践演習」により、課題解決力養成の過程を報告し、成果と課題を明らかにすることとした。

1) 短期大学部幼児教育学科

## II. 方 法

対象者は、本学短期大学部幼児教育学科2年生92名である。7つの専門ゼミナールに分かれ、担当教員とともに、教育機関、地域、行政に出向き、実践する。各ゼミナールのフィールドと活動状況については、III.の結果と考察で述べる。「保育・教職実践演習」では、岐阜県保育研究協議会と本学客員教授による講習会等を開催した。

## III. 結果と考察

### III.-1. 自己課題に基づいた保育現場での実践的な学び

#### III.-1.-1. 目 的

文科省(2017)は、保育者の質の向上が課題であるとし、これからの時代に求められる資質能力として「自律的に学ぶ姿勢をもち続け、自らの資質能力の向上に向けて努力を惜しまない新たな課題に対応できる力を付けること」が重要であると述べている。そこで、本ゼミでは、自己課題を持ち計画を立てて現場での実践を行い、保育者としての実践力、専門性の向上を目指した。

#### III.-1.-2. 取り組み

以下の3回の実践を行った。①および③の実践では、事前に協力園へ学生の計画を連絡して協力を得た。②の実践では、他県の保育現場を参与観察し、実践を通して子どもへの関わりや保育者の役割について学んだ。また、各園で、園長や保育者から体験談等を聞く機会を設けること、共に実践の振り返りを行うことを通して、自分自身を客観的に振り返ることができ、さらに、保育者としての自分と向き合うことにもつながった。

#### 保育実践①

日時：2017年6月21日 9:30~11:30

場所：G県G市A保育園

内容：発達年齢に応じた保育教材の実践（2歳児～5歳児）

#### 保育実践②

日時：2017年8月29日 10:00~13:00

場所：H県S市B幼稚園

内容：発達年齢に応じた関わりの実践（3歳児～5歳児）

#### 保育実践③

日時：2017年11月22日 9:00~10:00

場所：G県S市C幼稚園

内容：自己課題に応じた実践（3歳児～5歳児）

### III.-1.-3. 成果と課題

保育実践①では、2,3人でチームを組み、発達年齢に合わせた教材準備をして実践した。実際の子どもの反応を見て、準備不足や、やりとりの不十分さなど、自己の振り返りを行った。また、園長および配属クラスの保育者と共に、合同で振り返りを行い、現職からの指導を受け、さらに自己課題について考えることができた(図1)。



図1 園長の講話

保育実践②では、他県の園で環境構成など現場の保育者と共に遊び場面で子どもと関わった(図2)。言葉遣いなど風土が違う場所でも、保育における姿勢は同じであると実感することができた。また、遊びで学生同士がお互いの発達年齢に応じた関わり方を見ることにより、客観的な視点で自分を振り返った。園長を交えた懇話会では、保育者の役割や専門性について考えることができた。



図2 子どもと自然遊び

保育実践③では、様々な経験を通して各自の課題を設定し、実践を行った(図3)。課題は集団の観察や、手作り教材の実演等、様々である。終了後には、園長からの講評もいただき、各自卒業後の進路を踏まえた実践をしたことで、自己の保育と向き合うことができた。



図3 手作り絵本の実践

以上の実践において、学生は常に自己課題を持ち、それを意識することで自律的に学ぶ姿勢ができたとみられる。また、現場の園長、保育者に協力を得たことで、学生は自分の保育を客観的に振り返り、保育者としての自己を見つめ直すこともできた。今後

は、卒後も課題を持って取り組み、自己を振り返りながら学ぶ姿勢を持ち続けるサポート体制も考えていく。(明石英子)

### Ⅲ.-2. “Minokamo Family Project” の取り組みによる地域課題解決力の育成

#### Ⅲ.-2.-1. 目的

学生による課題解決事業として、2017年度“Minokamo Family Project”に取り組んだ。行政と連携した企画への参画は、学外の大人との意思疎通を円滑に行い、地域社会での課題解決力を身につけることを目的とした。

#### Ⅲ.-2.-2. 取り組み

美濃加茂市の職員とともに、子育て支援施設における子育て中の母親と交流し、「ママインタビュー」を実施し、さらに美濃加茂市内の企業や団体の子育て中の男性職員に「パパインタビュー」を実施した。

##### 1. 美濃加茂市のガイダンス

日時：2017年4月26日 9:10~10:40

参加者：学生14名、美濃加茂市経営企画部2名、子育て支援課2名

場所：中部学院大学

##### 2. 母親の意識調査（ママインタビュー）

日時：2017年5月17日 9:10~12:30

場所：子育て支援センター『ほたるの広場』、『山の上交流センター』（美濃加茂市）

##### 3. 父親の意識調査（パパインタビュー）

日時：2017年7月12日 9:10~12:30

場所：JAめぐみの、美濃加茂市商工会議所、大垣共立銀行、十六銀行、若尾製菓株式会社、中部電力加茂営業所

#### Ⅲ.-2.-3. 成果と課題

美濃加茂市による施策のガイダンスでは、地域の子育ての課題の説明を受けた（図4）。学生は、自分の育ちと照らし合わせて認識することで、課題をより深く追求する準備が整った。その後、母親への意識調査の項目協議を経て、子育て支援センターへママインタビューに



図4 美濃加茂市のガイダンス

出かけた（図5）。母親とのコミュニケーションは、保育士の重要な役目である。対象者の属性を見極め、回答の意味を素早く理解して会話を続ける必要があった。中には、子育ての心配事に、保育者としての意見を求める母親もいた。保育者は、経験年数を問わず専門性を求められることから、対象者への理解力と現場での即戦力の重要性が認識できた。このやり取りで得られた回答から、夫へ物理的支援以上に“感謝の気持ちの表出”が最も求められていることが分かった。



図5 ママインタビュー

父親の意識調査（図6）では「妻にリラックスしてもらうために努力していること」や「感謝の気持ちを伝えているか」の質問を設定し、夫婦双方の意識のすり合わせを試みた。その結果、夫は育児にできるだけ参加しようと試みていることや、妻への感謝を常に持っていることが分かったが、それが十分に伝わっていないことが課題であることが分かった。そこで、美濃加茂市主催の子どもフェスタにおいて、『ママサンキュー ♡フォーエバー』を企画して、親子遊びの指導力を発揮し、家族の絆づくりに貢献できた。



図6 パパインタビュー

子育てに関する母親や父親の立場の理解や課題を、学生の視点で検討することで、学生自身のワーク・ライフ・バランスを考え、将来の地域の担い手となる効果が見られた。今回のフィールドワークで得た課題解決の推進を卒後にも発揮できるように、常に周囲との連携を意識して学ぶ姿勢を持ち、コミュニケーション力を高めることが今後の課題である。

子育てに関する母親や父親の立場の理解や課題を、学生の視点で検討することで、学生自身のワーク・ライフ・バランスを考え、将来の地域の担い手となる効果が見られた。今回のフィールドワークで得た課題解決の推進を卒後にも発揮できるように、常に周囲との連携を意識して学ぶ姿勢を持ち、コミュニケーション力を高めることが今後の課題である。(杉山祐子)

### Ⅲ.-3. 保育児の保護者とのコミュニケーション力の育成を目指して

#### Ⅲ.-3.-1. 目的

短期大学の卒業生からは「現場で保護者との関わりに非常に戸惑う」という声を多く聞く。なぜなら、現場で出会う保護者達は新任保育者より年齢が高い場合が多い。在学中、保護者へ対応するスキルを身

につける機会が乏しいのではないかと考えた。成田(2012)の調査結果によれば、保育者の約8割が日頃の保護者対応で困っている、とあり、中でも経験年数の浅い保育者が困っている。そこで、本学が所在する関市のこども館で、親子のふれあいあそびの企画・実践活動をすることで、親とのコミュニケーションスキルを身につけることとした。

### Ⅲ.-3.-2. 取り組み

こども館での4回の未就学児の親子との交流

場 所：関市安桜こども館

対象者：安桜こども館児童厚生員、安桜こども館に  
来館した未就学児の親子

実践内容：15名のゼミ生を、A・B・C各5名の3  
つのグループに分けた。

第1回目：2017年5月17日9時30分～12時

内容：手遊び、ふれあい遊び、製作あそび(図7)

第2回目：2017年6月28日9時30分～12時

内容：親子でスキンシップ、運動遊び、段ボール  
列車。

第3回目：2017年7月12日9時30分～12時

内容：エプロンシアター、大型絵本の読み聞かせ、  
親子でスキンシップ(図8, 9)。

第4回目：2017年7月26日9時30分～12時

内容：安桜こども館夏祭りのあそびのブース  
(ボールころがし、おかしつかみ、おかし  
すくい、わなげ、くじびき)。



図7 マラカスの制作



図8 参加者全員の手遊び



図9 親子でスキンシップ

### Ⅲ.-3.-3. 成果と課題

学生たちは、安桜こども館の先生方から実践活動のアドバイスを毎回頂き、次回への課題として実践を積み重ねていくことができた。学生たちは、現場の指導者から直接アドバイスを受ける貴重な機会となり、学生自らが自己課題を追究する力となった。また、5月から7月まで継続的かつ定期的な実践活動を行ったことによって、学生たちの訪問を楽しみに参加してくれる親子の姿も見られるようになった。このことは、学生にとっても親子との距離を縮め、子どもを仲介として親と家での子どもの様子や、子育ての話しを聞ける関係性へと変化していった。そのほか、個別に親子との関わりを深め、保育者としての喜びを感じることができた。そして、保育者の役割の重要性を再認識することができた。

未就学児親子との交流は、遊びの提供を通して親と関わるきっかけづくりを学ぶことができた。遊びの中へ親子をどのようにして巻き込み、遊びの中心へ導いていくための声掛けのタイミングや言葉の選び方を経験することができた。この経験により親とのコミュニケーション力が高まった。そして、親子とのふれあいを通して、子育ての現状を理解し、親の気持ちに寄り添える保育の担い手になる効果が期待された。

(平松喜代江)

### Ⅲ.-4. 親子に対する遊び活動の企画・運営が学生の対応力に及ぼす影響

#### Ⅲ.-4.-1. 目的

近年、子育てに対する問題が大きく取り上げられている。育児をしている母親への調査では、専業主婦の80%以上が、育児に疲れる、イライラする、自分の育児に自信を持ってないなどの感情を経験していたと報告がある(宮本, 2000)。一方、保育園や幼稚園からの保護者に対するサポートがあると、保護者の育児不安や子育ての悩みが軽減すると報告がある(子育て環境研究会, 2006)。そのため、保護者に対応するスキルも学生のうちに身に付けておかなければならないと考える。そこで、本専門ゼミナールでは、長良川鉄道と共同企画で行った親子に対する遊びの提供活動から、学生の保護者への対応力を身に付けることを目的とした。

### Ⅲ.-4.-2. 取り組み

日 時：2017年7月1日 9：00～15：00

参加者：『NAGARA あそびスタートレイン（七夕トレイン）』に参加した10家庭（保護者12名、子ども16名）

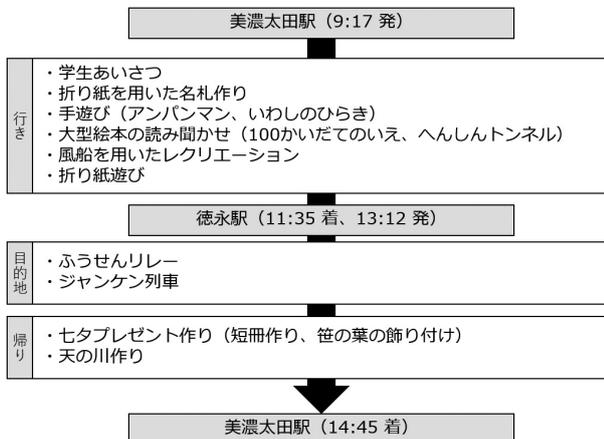


図10 七夕トレイン 活動の全体像

内容：図10は、七夕トレインにおける活動の全体像を示している。行きの車内では、名札作り、手遊び（アンパンマン、いわしのひらき）、大型絵本の読み聞かせ（100かいだてのいえ、へんしんトンネル）、そして折り紙遊びを提供した。目的地である「やまと総合センター」に到着した後、昼食を食べ、ふうせんリレー、およびジャンケン列車といった運動遊びを行った。帰りの車内では、七夕にちなんだ遊びとして、短冊作りや笹の葉の飾り付けを行い、画用紙と折り紙を用いた天の川作りを提供した。これらすべての活動は、小椋ゼミの学生が企画・運営を行った（図11、12）。



図11 車内での活動



図12 運動あそび

アンケート調査：本活動において、保護者が感じた学生の対応力や活動自体に対する評価として、調査協力に同意があった保護者11名にアンケートを行った。アンケート項目は「社会

性：社会人としての適切な対応（言葉遣い・身だしなみ等）ができたか」、「人間関係力：他者と関わりながら指導ができたか」、「協調力：仲間と一緒に共同しながら遊びが発展できたか」、「満足度：保護者自身が満足することができたか」の4項目であった。

### Ⅲ.-4.-3. 成果と課題

表1 保護者から見た学生の対応力および活動の満足度

	達成度(%)
「社会性」：かかわりへの積極性、適切な援助、言葉がけ、言葉遣い、服装、身だしなみ	90.0
「人間関係力」：子どもを惹きつけ子どもから引き出す力。親、他者とかかわる力	78.6
「協調力」：仲間と一緒に共同しながらあそびを発展させることができる力	85.7
「満足度」：保護者自身が、様々な遊びをたのしむことができたか。	87.0

表1は、保護者から見た学生の対応力および活動の満足度に関するアンケート調査の結果を達成度(%)で示している。アンケート調査の結果、社会性において90.0%、人間関係力において78.6%、協調力において85.7%、満足度において87.0%であり、人間関係力を除いて80%を超える値であった。自由記述には、「学生が子どもに明るく積極的に声をかけてくれた」、「子どものやりたいことを尊重してくれた」、「子どもの年齢幅がある中、よくまとめた」という意見が見られた。これは、本短期大学の1年生から行われている基礎ゼミナールで培われた力が、2年生になっても受け継がれていることが考えられる。また、本企画の計画時、どの世代にも対応できるよう、チームで試行錯誤しながら活動を考えたことが今回の評価の要因と考えられる。この結果から、まずは子どもを楽しませる活動を考えることが、学生同士のコミュニケーション（協調力）にもつながることが考えられ、さらにそこから保護者の満足度にもつながることが考えられた。また、学生としても、様々な場面を想像しながら計画をすることの重要性を再確認することにつながった。「人間関係力」の評価は唯一80%未満であった。自由記述には、「学生同士で集まってしまわない。」、「広

い視野が必要であった。」が挙げられた。例えば、全員で昼食をとるとき、学生のみで集まってしまう場面が見られたり、全体的に保護者の方と積極的に話している学生が少なかったことが挙げられる。そのため、学生は、子どもに対する接し方のみでなく、「周りを見る力」や、子どもと楽しみながら保護者も会話や活動に巻き込んでいくような「人間関係力」の向上が今後必要であると考えられた。

(小椋優作)

### Ⅲ.-5. 発達が気になる子の理解と援助の在り方

～「関市中央親子教室ようくん」実習を通して～

#### Ⅲ.-5.-1. 目的

「保育者はその新任の時から、子どもたちをクラスという枠内において託されて、担任という役割を果たすように身を置くことになる。(中略) 言い換えるならば、保育現場は、新任当初からまるごとの子どもの育ちを支えるという重責を担わされる(大場 2007)。」すなわち、新人であっても、子どもや保護者からは一人前の保育者として期待されるのである。従って、新人保育者の中には、経験不足と焦りから、クラス経営が思うように行かず、担任したクラスの子どもたちが「気になる子」と思ってしまう時もあるのではないだろうか。そこで、多様化する保育の現場を鑑み、目の前の子どもの行為の意味が理解でき、障がいの有無にかかわらず、発達過程に応じた援助ができていくよう、保育者としての資質を培うことを目的とする。このことが引いては、新人保育者としての不安を削減し、気持ちにゆとりをもって現場に立つことができると考える。

#### Ⅲ.-5.-2. 取り組み

専門機関(関市中央親子教室ようくん)での療育への参加(3回)を通し、体験をレポート化した。この際、各自が毎回目的を明確にして参加し、「関わりの在り方」、「目の前の子どもの興味・関心」「内面理解」、「環境構成」、「療育者の援助の在り方」などに視点を置き記録をとっていった。参加の際には、対象の乳幼児1人に対し、学生は1～2人と言う小グループに分けられ、乳幼児の遊びの様子が分かりやすいよう配慮された。

尚、毎実習の最後には全員で手遊びを行い、能動的に遊びを展開できる体験の場も意図的に持った

(図13)。更に、各担当の療育者によるレポートの添削も行われ、療育の現場ならではの細やかな示唆がいただけた。また、幼稚園実習・保育園実習においても「発達が気になる子」についてエピソードを記録し、ゼミの時間に実習の振り返りを行い、各自のレポートを基に意見交換を重ねた。



図13 全員で手遊び

学外での最終実習は保・幼・小の接続の実際を学ぶため、中濃特別支援学校へ出向き、障がいを抱えた児童生徒の授業参観を行った。

#### Ⅲ.-5.-3. 成果と課題

基礎ゼミナールで培った「あそびすと」としての力の発揮については、一対一の療育を主とする本ゼミでは、常に目の前の子どもの行為から心の目を離すことなく、素早く察知し、対応する力が求められる(図14)。学生に差はあるものの、子どもの思いに精一杯対応しようとする「あそびすと」で培った力が反映されていることを確認した。



図14 子どもと思いを共有

「書く力」においては、毎回の実習体験をレポート化するのだから、本時のねらいに対する記述の際、体験・観察した中で、何処を書くのかという必要な部分を選択する力、それを読み手に分かるように文章にする力、そして療育を改めて振り返り考察する力など要求される。

これらの体験を通し培った力を基に、「子どもから学ぶ」、「保護者から学ぶ」、「同僚から学ぶ」など、未来を担う子らの傍らにあることを自覚し、学び続ける保育者になってほしいと心より願う。

(沖中秀子)

### Ⅲ.-6. タイ交流旅行に対する学生の実践力育成の取り組み

#### Ⅲ.-6.-1. 目的

本ゼミナールでは、昨年よりタイの特別支援学校及び私立幼稚園、公立保育園の見学実習を実施して

いる。本年度は、タイ交流旅行として大学全体で参加者を募り、その中心的役割を幼児教育学科の学生が担い見学実習等を実施してきた。日本とタイの特別支援教育について違いを学び、広い視野で保育を俯瞰できる力を養う。また、タイの子どもたちと手遊びを通じて、遊びの楽しさを共有し、言語によるコミュニケーションが困難な子どもたちとの交流の中から実践的能力を養う。そして事前準備として必要なものを自ら考え準備できる企画力を養うことを目的とした。

### Ⅲ.-6.-2. 取り組み

期間：2017年8月20日～2017年8月24日

場所：タイ王国（ロップブリー県・バンコク）

内容：ゼミ学生全員の取り組み、事前準備として、1施設に1つずつの壁面を作成した。文化や習慣が違うことに気づき、壁面作りを行う前に、タイ王国について調べ学習を実施していた。大切にしている動物や子どもたちの服装、挨拶の方法等について調べた。そして、最も長時間見学実習を実施するロップブリー特別支援学校へは幼稚部の子どもたちを対象にメダルのお土産を作成した。

私立ガムジョンウィット幼稚園では、子どもたちと一緒に手あそびを行うことが分かっていたため、歌に合わせて全ての手あそびを細かく分けて図式化した。タイに行く学生がタイに行かない学生に向けて実際に手あそびをしてみたところ、1回目の絵は分割が大まかだったため、「わからない。」「ついていけない。」という意見が出た。2回目に作り直したものは、分割は多くなり分かりやすくなったが、絵が分かりにくかったため作り直すことになった。

ロップブリー特別支援学校では最初に学校案内ビデオを視聴し、その後校内見学及び幼稚部での交流会を実施した。交流会には、メダルを1人1人の首



図15 お土産の壁面と記念撮影

にかけて渡した(図15)。子どもたちの授業を見学する時には、子どもと同じ高さまで下がり、一緒に授業を受けた。また私立ガムジョンウィット幼稚園では、「ゲー・チョコキ・パーで何作ろう」と「あたま・かた・ひざ・ぼん」を歌いながら一緒に手遊びを行った。本学学生

は日本語で歌を歌うたい、ゲー・チョコキ・パーは絵でそれぞれを表したものを持参しそれを持ち上げながら遊んだ。あたま・かた・ひざも絵に描き、それを高いところに上げながら、子どもたちが絵を見ただけでわかるようにして実施した(図16)。



図16 手あそびの説明の様子

### Ⅲ.-6.-3. 成果と課題

特別支援学校幼稚部の子どもたちはとても人懐っこく、学生の方に自ら寄ってきて手を取り授業への参加を促していた。学生もそれに合わせるように子どもの隣に座りながら先生の授業を受け、子どもの目線に合わせていた。学生はメダルを1人1人の首にかけて時、何か話しかけたいと思っていたが、タイ語が話せないため笑顔で子どもたちに接するよう心掛けている姿が見られた。

私立ガムジョンウィット幼稚園では言語によるコミュニケーションを取ることができない状況で、楽しい時間を共有するかが課題であったが、歌に出てくる全てのを事前に絵にしておいたため、それをタイミングよく見せることで共通理解を得ることができた。子どもたちが集中しない時には声に強弱をつけ、子どもたちが注目するように話を進めていた。

学生の感想の中には、「海外の障がい児教育が今まではイメージできなかったが、見学したことによって理解が深まったように感じた」「日本でできたことでも海外では上手くできなかったことが多かったため、工夫が必要だと気づくことができた」「日本の伝統的なあそび(折り紙等)の素晴らしさに気づくことができた」等が見られた。また、海外での保育実習で身についた力についてはコミュニケーション力がついたと、最も多くの学生が感じていた(図17)。

これからの保育士は入園してくる園児を取り巻く環境の変化に伴い、グローバルな対応が求められると考えられる。今回のように、言語によるコミュニケーションが取りづらい場面では、保育士がコミュニケーションツールを工夫し、自ら手あそびの具体的提案をしなくてはいけなくなる。これらのような状況を想定し教職実践演習では学生の企画力や実践

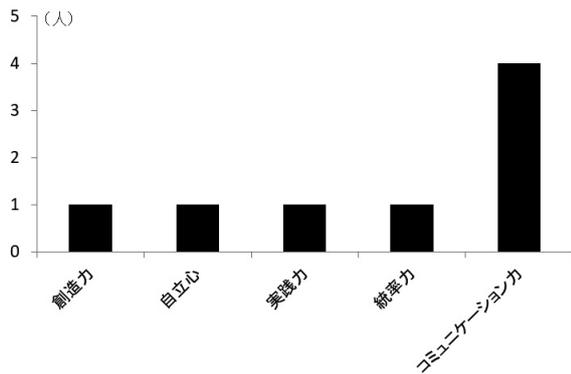


図17 海外での保育実習で身につけた力（自己評価）

力を身につけさせ、社会に輩出する上で、様々な場面にに対応できる保育士育成をしなければいけないと感じた。（菊池啓子）

### Ⅲ.-7. 特別支援学校小学部での造形ワークショップの取り組み

#### Ⅲ.-7.-1. 目的

保育士となり就労先で出会うであろう障がいのある子ども達における支援の在り方を考えるに当たり、特別支援学校（小学部肢体不自由児）をフィールドワークの場とすることで障がい児に対してより理解を深めると共に指導力を高めることを目的とした。

特に、障がいがある子が楽しく造形活動ができる支援を考えることにより、卒業後、保育等現場での具体的な『表現』に関わる課題解決の力を高めることとした。

#### Ⅲ.-7.-2. 取り組み

場所：関特別支援学校（岐阜県）

(1) 事前学校訪問（6月14日：9：10～12：20）

小学部全児童（19人）の実態把握のため部朝会見学や実態別縦割りグループ編制の「自立活動（触れる）」に参加する。

(2) 計画と準備

障がい実態に合わせた3つの学習グループに別れ、各グループのねらいに応じた教材研究（材料購入し教材作り）をし、授業計画案（40分授業）を作成した。

(3) 実践（9月27日：1・2限）

・1班『新聞紙で遊ぼう』（児童7人、学生5人）

様々な大きさや形につなぎ合わせた新聞紙を

使ってパラシュート遊び、引っ張り遊び、紙吹雪遊びを行う。大きな動きのあるパラシュートでみんなが遊べ、また、紙を破ったり、丸めたり、箱に投げ入れたりといろいろな動作を入れた遊びの工夫がなされ子どもたちが生き生きと活動ができた（図18）。



図18 新聞紙のパラシュート

・2班『いろいろな楽器を作って遊ぼう』（児童6人、学生5人）

日常に使う紙カップや皿、空き箱等を材料に手作り楽器を共に作り学生のキーボード演奏に合わせて一緒に演奏して遊ぶ。子どもたちが興味関心を持つような楽器が多く用意され、選択することができ、さらに出上がった楽器で演奏する一連の流れが、子どもたちに分かり易い活動になった（図19）。



図19 身近な材料で楽器作り

・3班『レインスティックを作って遊ぼう』（児童6人、学生3人）

事前に作ったレインスティックに装飾し、豆を入れ、その雨のような音を楽しむ活動を行う。いろいろな豆の種類があり、さらに、小石やビーズが用意し、十分に感触遊びを楽しむことができた。いろいろな刺激に低反応な子どももレインスティックの中に入れる素材の違いによる音の変化に耳を傾ける様子や楽しい表情が見られた（図20）。



図20 レインスティックづくり

#### Ⅲ.-7.-3. 成果と課題

日常生活全面で介助の必要な肢体不自由児が保育現場で実際に出会うことは少ないが、重度重複障がいを持つ子どもたちを前にして、どのようにコミュニケーションを図るかを、物づくりを通して真剣に考えるきっかけとなった。特別支援学校の教師が子どもの顔をしっかりと見て、ゆっくり分かりやすい言

葉がけをし、活動しやすい体位や姿勢を整え、看護師と共に体温やバイタルチェックなど体調管理をすることから始める様子を見ることで、学習レディネスの大切さ学ぶことができた。保育士として常に働きに対して子どもたちの反応をきめ細かに捉え、自身が子どもと共に楽しい、楽しいと思える状況をつくり、共感して寄り添えることが保育士としても重要な視点であるとともに、フィールドワークとして特別支援学校の活動は、障がいのある無しに関わらず共生社会のあり方を含めた保育に関わる『気づき』が多く望める実践の場と考える。

(土屋明之)

### Ⅲ.-8. 保育・教職実践演習での振り返りと共有

「保育・教職実践演習」では、各ゼミナールでの活動による成果と課題を、全体で共有し、専門的助言を得る講座を設けた。その中の代表的な2講座について報告する。

#### Ⅲ.-8.-1. 「新沢としひこ特別講義—歌ってあそんで—」

日時：2017年10月25日 10：50～12：20

場所：中部学院大学 グレースホール

保育現場での子どもとのコミュニケーションや遊びへの導入法の重要さは、各ゼミナールでの取り組みの中で、学生が認識したところである。得に乳幼児に対するノンバーバルコミュニケーションとしての音楽は、もっとも早い時期から導入が可能で効果的である。そこで、元保育士であり、保育現場で多く活用されている音楽作品を持つシンガーソングライターの新沢としひこ氏による講座を開催した。音楽を介して、相手の様子を汲み取る方法や、仲間作



図21 新沢先生とともに

りを学んだ(図21)。また、音楽によるイメージ構築の技法を、実践とともに習得した。学生は、初体面の親子との関係づくりや、初めての環境の中での緊張感を解消に、音楽が役立つことが理解できた。すべての取り組みに共通することとして、遊びの提供者自身が生き生きと楽しむ姿勢を持つことで、相手も楽しんでくれるということであった。

#### Ⅲ.-8.-2. 岐阜県保育研究協議会による「学生向け研修」

第1回目：2017年10月11日 10：50～12：20

第2回目：2017年12月20日 10：50～12：20

場 所：中部学院大学短期大学部

岐阜県保育研究協議会が岐阜県より受託している「保育士養成施設の学生のための研修」が2年生全員を対象に開催された

(図22)。この研修のねらいは、現場保育士から話を聞くことで、保育士として働く意欲を一層高めることである。公立保育園・私立保育園の先生を



図22 現場保育士の講話

講師として、保育の現状や魅力を、多くの事例を上げて紹介していただいた。特に学生が今後遭遇するであろう「乳幼児理解」、「保護者支援」などに対し、現場の実態と専門的見地からの助言をいただいた。質疑応答では、卒業し現場に立つまでに、どのような準備をするべきかという質問に、子どもとコミュニケーションが取れるアイテムの制作や、子どもの前に立った時の心構えの準備が挙げられ、4月からのイメージ作りができた。学生は、現場の保育者のやり甲斐や喜びを聴くことで、より仕事に対するイメージを構築でき、これまでゼミごとの取り組みで学んだことが再確認できた。さらに、子どもや保護者に対し、理解を深め、解決策を模索し、職場で共有することの重要性に気づくことができた。

以上の学生全体で行う研修により、仲間と課題を共有することができた。卒後、孤独感に陥ることが無いよう、このつながりを大切にし、短期大学での学びの収穫を生かしていく意識を持つことができた。

(杉山祐子)

## Ⅳ. 全体的考察と今後の課題

今回の取り組みでは、1年次に身につけた基礎力を地域の保育関係機関でのフィールドワークにより、発展力につなげることができた。特に、グループに分かれて企画を進めることは、現場での職員間の意思疎通や協働作業の礎となった。さらに、フィールドワークならではの特徴である、現場の職員に助言をいただくことができた。また、保護者と接する

機会にも恵まれた。このような環境で、学生が自主的に企画・準備・運営・振り返りを実施した結果、自らの課題に気づき、その解決法を模索し、全体で共有する機会となった。さらに「保育・教職実践演習」における保育の専門家からの助言により、卒後も課題を持って取り組み、自己を振り返りながら学び続ける姿勢をサポートする体制も考えていく必要性が分かった。

今後の課題として、コミュニケーション力の一層の向上があった。グローバル化による海外との交流、障がいを持つ子どもとの心の通わせ方、乳児や保護者とも意思疎通は欠かせない。今後は、どのコミュニケーションツールが最適であるか、体験とまとめの繰り返しにより判断する力を高めていきたい。(杉山祐子)

## V. おわりに

本報告は、2017年度の7つの「専門ゼミナール」が、1年次に一斉に体験し習得した保育の基礎力を、個人が発展的に応用し、現実と向き合いながら、課題解決を試みたものである。2年間という短い期間で、現場で子どもたちや保護者に向き合わなければならぬ。2年間でいかに技術を高めるかという点では、各教科での達成度に焦点を当る必要がある。それらを統合的に運用する2年間の継続的なゼミナールによる取り組みは、自己覚知と他者理解が根底にある。この体験を経ることで、専門職として現場へ送り出す準備が整うと考える。そのためには、体験にとどまらず、記録を取り、文字化することが重要である。2年生一人ひとりが、「卒業レポート」として体験をまとめる力と、まとめを発表する力が求められている。(杉山祐子)

## 引用文献

- 石田開, 田中まさ子 (2011) 「保育者養成課程の学外実習における保護者に関する経験の頻度」 岐阜聖徳学園短期大学部紀要, 43, pp.161-173.
- 大場幸夫 (2007) 「こどもの傍らに在ることの意味 保育臨床論考」, 萌文書林, p.175.
- 香川晴美, 鈴木正和, 伊藤潔志 (2013) 「保育者の専門性としての発表能力とその養成」, 山陽学園大学研究紀要第44号, pp.8-19.
- 子育て環境研究会 (2006) 「乳幼児をかかえる保護者の子育ての現状-不安・悩み、出産意欲」, 財団法人全国私立保育園連盟.
- 白幡久美子, 鈴木恒一, 岡田泰子, Dalrymple 規子 (2018) 「幼児教育・保育者の質を保証するカリキュラムの開発を目指す実践」, 教育実践研究第3巻第1号.
- 成田朋子 (2012) 「保護者対応に求められる保育者のコミュニケーション力」, 名古屋柳城短期大学研究紀要, 34, pp.65-76.
- 姫野完治, 石橋研一, 神居 隆, 斎藤 孝 (2010) 「教職実践演習のカリキュラム開発と試行」, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 33, pp.123-132.
- 宮本政子, 船越和代, 中添和代, 時岡恵美, 森美代子, 渋谷幸彦 (2000) 「乳幼児を持つ母親の育児不安の現状とその要因」, 香川県立医療短期大学紀要, 2, pp.115-121.
- 文部科学省 (2017) 「平成28年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究」, (2017.12.12)  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youchien/1385790.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm)